

入選 東京都 松石 勝則 様 (40代 男性)

確かあれば、僕が大学生の時だった。僕は大学で社会福祉を専攻していたのだが、社会保障制度に関する公的扶助の講義の中でとある DVD を観た。

何分若い頃の記憶なのであいまいではあるが、その DVD の内容は、ある大学生がバイク事故によって下肢機能障害を負ってしまったというものだった。その大学生は障害年金の受給を希望したが、国民年金が未納であったために受給できなかったという内容だった気がする。

講義では年金制度は老齢年金だけでなく、障害や遺族給付といった機能もあると先生から教わったと思う。しかし、大学生だった頃は年金制度など身近なものと感じられるはずもなく、DVD の大学生のケースも単なる不運なケースとしか思えなかった。

大学での授業で観た DVD のことなんてとうに忘れて何年も経った。大学を卒業して僕は福祉業界で働き、結婚をした。妻は、小さい会社で事務員として働いていた。結婚して子どもはできなかったが、二人で働きながら平穏な生活を日々送っていた。

妻の勤めていた会社は、小さいながらも経営は順調であった。会社の社長夫妻とは家族ぐるみのつき合いで、妻は長年そこで事務員として勤めていた。

そんな妻の人生は、難病の発症によって陰りを帯びていく。妻は、ドライアイやドライマウスといった乾燥症状を代表するシェーングレン症候群を発症した。さらに悪いことは続くもので、業績が良かったはずの妻の勤務先の会社が傾きかけていた。

妻は、シェーングレン症候群という難病を抱えながらも何とか仕事を続けた。そんなある日のこと、勤め先の社長から会社をたたみたいとうち明かされて、妻は会社を退職した。仕事を失った妻は、喪失感から不眠、意欲減退といった抑うつ症状に苛まれた。難病も抱えてこの先どうすればいいか…先の見えない不安に、妻は眠れない日々を過ごした。

そんな妻に、僕は知り合いの精神科クリニックに受診を勧めた。明らかに妻はうつ状態にあったからだ。医師は、妻を難治性のうつ病と診断した。

妻が退職して、しばらく経った。クリニックに通院し、服薬をするようになって妻のうつ症状も緩和してきた。僕は妻と相談して、障害年金を申請することに決めた。それはこれまで健常者として生きてきた妻が、障害者として生きていくことを意味するものであった。

妻は悩みながらも、通院先の精神科クリニックの主治医に障害年金の受給を希望したいと申し出た。

幸いというべきか僕は福祉関係で仕事をしていたので、障害年金についてはある程度の知識はあった。年金の申請については煩雑な部分もあったり、時間もかかったりしたが、妻の障害者年金の受給が決定した。

難病やうつ病を抱えながら生きていくのは大変だ。障害年金という生活上の支えを得て、妻は新たに障害者として新たな人生を歩み始めた。

障害年金を受給してからしばらくして妻と僕は、一匹の黒猫を家に迎えた。黒い長毛の子猫は、以前公園で捨てられていた保護猫であった。妻は一目ぼれをしたそうだった。

「猫を飼うことが小さい頃からの夢だったの、今は幸せだと思う」

部屋の中を短い足で走り回っている黒猫を眺めながら妻は言った。

人生は往々にして、不運や不条理に見舞われることもある。

僕が大学の時の授業で観た DVD のようなことが、よもや自分の家族の身にも起きるなんて夢にも思わなかった。当たり前のことかもしれないが、いいことばかりの人生なんてありはしない。

つらい時期を乗り越えていくためには、時に他者から助けを得ることも必要だとも思う。その一つが、年金制度かもしれない。

僕の支払っている年金の保険料は、将来自分の生活上の助けになるだろう。ただ、それだけでなく、他の誰かの助けにもなる。知らず知らずのうちに僕たちは、不運に見舞われた人たちの助けになっているかもしれない。それは素晴らしいこ

となのではないかと思う。

今は妻のうつ症状も寛解し、彼女も新しい人生を歩き始めている。難病であるシェーグレン症候群やうつ病による再発リスクは無くなる訳でない。しかし、つらい時期を乗り越えられたという経験は、今となっては良い思い出にもなりつつある。

思いがけない不運により新しい人生が開かれる時もある。その時に大事なものは、さまざまな人や公的サービスなどの助けだった。目に見えない多くのつながりによって妻も僕も支えられているのだと実感している。